

ある日、ぼくらは夢の中で出会う

003

ボクサア

99

上演記録

181

あとがきに代えて

184

ある日、ぼくらは夢の中で出会う

登場人物

男1 (カワハラ刑事部長／誘拐犯人カワハラ)

男2 (カトウ刑事／誘拐犯人カトウ)

男3 (ヤマモト刑事／誘拐犯人ヤマモト)

男4 (ミウラ刑事／誘拐犯人ミウラ)

闇の中に一人の男の姿が浮かび上がる。

男2

——その日ぼくは、とても新鮮な気持ちでひとつの門の前に立っていました。新しいものに触れる時、人は誰でも新鮮な気持ちをかみしめるものでしょう。何か言っても自分の言ったことばが白々と響き、何がホンモノで何がニセモノなのかわからないような時代ですが、ぼくは元気です。もうすぐ冬がきます。冬だからと言って「おからだを大切に」と話しかけることは、いささかオリジナリティに欠けることかもしれませんが、これが一番いいと思うのでやはりぼくはそう呼びかけます。おからだを大切に——。

ぼくは元気です。

暗転。

しばらくしてから照明。

舞台中央に机がひとつ。その上に電話。

あとは椅子が四脚、適当な位置に。

男2　なぜに、なぜに我々刑事は、映画やテレビの主人公になりやすいのか？

私は考えました。

男1　ふうむ……。

男3　そう言われれば、確かに刑事ドラマっていうのは多い気がするなあ。

男4　有名な俳優はだいたい刑事の役をやってるね。

男2　ええ。代表的なところを挙げますと――

クリント・イーストウッドの『ダーティハリー』

ジーン・ハックマンの『フレンチ・コネクション』

ステイブ・マックイーンの『ブリット』

ジョン・ウエインの『マックQ』

アラン・ドロンの『フリック・ストーリー』

ジャン・ポール・ベルモンドの『恐怖に襲われた街』

ピーター・フォークの『刑事コロンボ』

アル・パシーノの『セルピコ』——とまあこんなところです。

ほお、詳しいんだね。

はあ。無類の映画好きでして。

警察学校で刑事アクションの自主映画を撮ってたっていうのは……。

ぼくです。

やっぱりねえ。

……。

なぜなの？

は？

なぜ刑事は映画やテレビの主人公になりやすいんだい？

そう、それをまだ聞いていなかった。

ベテラン刑事のみなさんを前にして言うのもなんですけど……。

いいから言ってみたまえ。

はあ。一般的には「拳銃がブツ放せるからカッコイイ」というような理由が考

えられますが、拳銃とか手錠とか、そういう類の理由はあくまで外面的なものにすぎません。要は、刑事という職業についてまわる危険、この危険、あるいは危機感という要素が、ドラマの材料として適しているからであると私は考えます。

男4

なるほどねえ。

男3

ま、そうかもしれないなあ。

男2

何ゆえ危険か？ それは言わずと知れたことですが、我々の仕事は犯罪者を追うことだからです。犯罪者というのは常に危険な存在です。犯罪者、すなわち追われる人間というのは応々にして精神的な錯乱が激しく、何をしでかすかわからない状態にある場合が多い。

男4

うんうん。

男2

何をしでかすかわからない人間を相手にしなければならぬ我々の職業には、当然、危険が伴います。危険とはすなわち死です。現に我々の送る毎日は、「死と隣りあわせの毎日」などと呼ばれたりもします。

男3

死と隣りあわせの毎日ねえ……。

男2

兇悪な犯罪者を前に悠長なことは言ってはいただけません。一歩まちがえばこちらが殺られる。喰うか喰われるか、殺るか殺られるか、そこにあるのは弱肉強食の論理だけです。

男 4
男 2

確かに刑事って職業は、少なくとも八百屋よりは危険な商売だよなあ。
さらに、危険に直面した人間というのは時に臆病にもなるものです。危険に晒された状態というのは、人間の弱さを表現する上で絶妙なシチュエーションでもあるわけです。「生まれ、止まらんと撃つぞお！」と叫びながらもその瞬間、刑事は前の晩、恋人に言われたことばを思い出す。

「殺人、強盗……あなたのお仕事はいつも危険がいっぱいで恐いことばかり。あなたのからだには血の匂いがしみついて離れない。野辺に咲く一輪のお花の美しさに心を奪われることのない日々……。小鳥のさえずりに耳を傾けることのない日々……。殺伐とした毎日の中で、あなたは少しづつやさしい気持ち忘れていく。そんなあなたを見ているの、私、つらい」

男 1

しかし、刑事はピタリと犯人に銃口を定め、情容赦なく引き金を引く。ダキュン！ オレは……オレは刑事なんだ！ この相剋、この苦惱！ あははははは。

男 3

……。

男 4

……。

男 2

こんなのもいいですね。麻薬シンジケートへGメンとして潜入するが、刑事であることが発覚！ 抵抗むなしく麻薬をうたれ、完全な中毒者になってしまおう。が、先輩刑事の必死の介抱の甲斐あってか、回復し、見事にシンジケート

を壊滅する！ あははははは。こんなもあります。大学時代、同じクラブの後輩だった男が殺人事件の容疑者として捜査線上に浮かびあがる。「あいつはそんなことする奴じゃありません！」「いいか、カトウ、公私を混同してはいかん。お前は刑事なんだ」厳しく詰めよる先輩刑事。「いいえ、私は何より刑事である前に一人の人間なんです」この生身の人間のぶつかりあい！ あははははは。しかも、ぶつかりあうのは人間だけではありません。車と車のぶつかりあい、カーチェイス！ 「追え！」キーンツ、ズキュルキュルキュル、地を蹴り、グワァーンアンアン、宙を舞うフェアレディZ！ 坂の多いサンフランシスコを舞台にくりひろげられる手に汗にぎるサスペンス・アクション！ あははははは……。

男1

ゴホン……。

男2

あ。これはどうも。ショッパナからとんだところを。つい調子にのりまして。

男1

カトウ君……だったね。

男2

はい。

男1

君はそんな夢を刑事生活に託しているわけだ。

男2

夢というのもなんですが……。

男1

君たち若い刑事は、どうしてそういう発想しかできんのかなあ。

男2

そういう発想とはどういう発想ですか？

男1 刑事がなぜ映画やテレビで多く取り扱われるかという説明はまだしも、何なんだ、君の思い描いている刑事生活は。まるでテレビの中の事件、ドラマの中の刑事像と同じじゃないか。

男2 何分、テレビの刑事ドラマを見て育ったものですか。

男1 現実はそのなりに甘くないよ。

男2 それはもう……。

男1 ま、君のような若い刑事にテレビの刑事ドラマに影響されるな、という方が無理なことかもしれないが。

男4 しかし、近頃の若い刑事は刑事もののドラマなんか見て、それで「オレもあんな風にかっこイイ刑事になりたいなあ」なんて思うんだろうなあ。そうなんだろう？

男2 それがすべてだとは思いませんが、やはり影響は否めません。

男3 影響されるのはかまわんが、本末を転倒してもらっちゃあ困るなあ。現実テレビとはちがうんだよ。

男2 もちろんそれはわかっているつもりです。

男1 わかっているつもり……か。

男2 いえ、今後の捜査を通してわかっていくだろうと……。

男4 いいか、ホンモノの刑事は我々なんだ。あくまでホンモノの刑事としてのオリ

男2 ジナリテイを大切にせにやいかん。フィクションの真似をして何が刑事だ。
はあ……。

男1 例えば、だ。ミ―ハーな女子大生なんか「やつぱりテレビみたいな事件が実際に起こるんですか？」などと質問されたら、「ははは」と笑って「あんなに甘くはおまへん」

男2 なぜ関西弁なんですか？

男1 この方が何かこう冷徹な職業人ってかんじがするだろう。で、こう続ける。「テレビなんかだと水死体もきれいなものですが、実際の水死体はあんなもんやおまへん」

男2 実際の水死体はあんなにきれいなものじゃなく、もっと汚ないものであるってことを説明してやるんですか？

男1 それでは余りに芸がない。そこでこう言ってやる。「実際の水死体は指でつつくと笑います」

男2 それじゃメチャクチャじゃないですか。

男1 ホンモノの刑事としての面目を保つためには、多少の誇張はやむをえない。

男3 ホンモノの刑事は足で歩きます。手で歩きます。

男2 そんな馬鹿な。

男4 ホンモノの刑事はゴハンを食べません。麦を食べます。

男2 ゴハン食べますよ。

男1 ホンモノの刑事の血は赤くありません。緑色です。

男2 それじゃ化物だ。

男4 要は、我々がホンモノであるためのオリジナリティの問題なんだ。ホンモノはやはりニセモノとのちがいを明確にしておかなくてはいかん。

男3 ホンモノの刑事は空を飛べます。

男2 そこまでいくと現実の方がよっぽどフィクションめいてきますよ。

男1 フィクションめいているじゃないか、昨今の新聞を賑わすもろの犯罪は。

男2 ……しかし、しかしです。犯罪というのは我々刑事が作り出すものではなく、犯罪者によって作られるものじゃないですか。いくら我々がガンバッテみても、事件は常に犯罪者がいてはじめて成立するんですし。

男1 犯罪者がいないのなら、自分で犯罪を犯してでも刑事としての面目を保とうというのが、我々ホンモノのあり方なんだよ。

男2 そんな。

男3 テレビの刑事さんはそんなことしないって言いたいんだろう。

男2 ……。

男4 要は気概の問題だ。テレビなんかの刑事に負けていられるか——この心意気なんだ。

男2 しかし、ホンモノの刑事は犯罪を犯してでも云々というのはどうもちよつと……。

男1 だからそれくらいの気概を持って捜査に励んでほしいということなんだ。現実にはテレビとはちがうんだ。そのうち君にもわかると思うが。

男2 はあ。

男1 あ、そうそう。紹介が遅れてしまったな。彼がヤマモト刑事。柔道五段だ。

男2 よろしくお願いします。

男1 彼がミウラ刑事、書道五段だ。

男2 よろしくお願いします。

男1 そして、私がカワハラ刑事部長だ。

男2 は。新米なもので何かとお世話になるとは思います、何分よろしくお願いします。

男1 ま、そこへ掛けたまえ。

男2 は。

問。

男2 あの……。

ボク
サア

登場人物

男 1 (カトウ)

男 2 (カワハラ)

男 3 (ミウラ)

男 4 (ヤマモト)

女 (キョウコ)

舞台を包み込む漆黒の闇。

男3の声 真暗だ……。

男2の声 お前は馬鹿か？ 誰が真暗じゃないって言ったんだ？

女の声 変な言い方するわね。

男2の声 何が変なんだよ。

女の声 だって……変じゃない、そんなの……ねえ？

男4の声 そうだよ。ミウラはただ「今、ここは真暗闇なんだ」って言って、みんなの置かれた状況を確認したかっただけだよ。な？ ……な？ ……な？ ……な？ ……返事をしろよ。

男3の声 頷いてるんです。

男1の声 おいちよつと……おいつたら……これ誰だよ。

女の声 キョウコだよ。

男1の声 何やってんだよ。

女の声 何やってるって……何もしてないわよ。何するの!?

男1の声 何もしてないだろう。

女の声 今、触ったじゃない。

男1の声　そこにいと邪魔なんだよ。

男4の声　明りはまだかよ。

男1の声　今、スイッチを探してるんだよ。

女の声　自分の部屋なのになんでスイッチを探さなきゃいけないの？

男1の声　ないんだから仕方ないだろう。

男3の声　スイッチがないんですか？

男1の声　あるよ。あるけど……スイッチのヒモが……。

男2の声　上にあがつちやつてるんじゃないのか。

男4の声　何か変なニオイがしないか？

男3の声　変なニオイ？

女の声　そう言えば……何か……するわね。

男3の声　ぼくは別に感じないけど……。

男2の声　(溜息)

男4の声　いや、確かにする。

男3の声　何のニオイがするんです？

女の声　何だろう……何か……甘酸っぱいような……。

男4の声　ゲロのニオイだ。

男1の声　バカタレ。他人ひとの家うちに来てゲロのニオイがするたあ何て言い草だ。

男4の声　だつて……。

男2の声　おい、何やつてんだ？　おい誰だ、ここで寝てる奴は……。

間。

男2の声　何だ、冷たくなってるじゃねえか。

男3、男4、女の悲鳴。

男1の声　静かにしろよ。

女の声　だつて誰かが寝てるとか何とか……。

男2の声　冗談だよ、嘘。

女の声　もう……馬鹿。何てこと言うのよ。

男4の声　やめろよな、そういうの。オレがそういうことにスゴク弱いつてこと知ってるだろう。

男2の声　だからやっただよ。うはははは。

男3の声　痛！

何かものが転がる音。

男1の声
今度は何だ？

女の声
大丈夫？

男4の声
まだかよ、明りは。

男2の声
……金を持ってきた。金を持ってきたぞ。（声色を変えて）時間に正確だな。今ジャスト午後十時だ。（再びもとの声で）どこだ？ どこにいる？（声色を変えて）動くんじゃねえ。

女の声
ねえ。

男2の声
何だ。

女の声
何やってるの？

男2の声
一人二役だよ。

女の声
なんで一人二役やってるの？

男2の声
暗闇の中で一人二役やると面白えからやってんだよ。文句あるか？

女の声
別に文句はないけどね。

男3の声
はくしょん。

男4の声
くしゃみでした。

男3の声
解説しなくてもわかります。

女の声　ねえカトウ君、ボヤツとしてないではやく電気をつけてよ。

男1の声　だからスイッチを探してると言っただろう。

男2の声　真暗で何も見えないのにどうしてカトウがボヤツとしてるってことがわかるんだ？

女の声　あなたもいちいち変なことにこだわるわね。そう思っただけよ。想像したの。

「今、カトウ君はボヤツとしてるんじゃないかな」って。

男2の声　じゃあ、今オレが何をしてるか想像してみろよ。

女の声　あなたは想像しなくてもわかるわ。私のお尻を触ってるのよ！

「バチン」と頬を叩く音とともに照明が入る。

舞台は男1のアパートの一室。舞台の中央にドアがひとつ。

女はまちがえて男3を殴っている。

女　あら……ごめんなさい……まちがえちゃった……。

男2　わはははは。

女　あなたが悪いのよ。もう……馬鹿。

男3　いいんです。気にしないでください。

男2　結構きれいにしてるじゃねえか。

男1 ま、みんなそのへんに適当に座っててくれよ。

男3、自分の蹴とばしたもの（『目覚し時計』を拾って置き直す。
彼はポテトチップの袋を持っている。

男4 何時なんだ？

女 ごめんなさい……ホントに……。

男3 大丈夫大丈夫。

男4 ミウラ。

女 でもスゴク痛そうな音したよ、「パン！」って。

男4 何時になるんだ？

男3 え？

男4 時間だよ、時間。

男3 ああ……一時四十分。

女 （男1に）何してるの？

男1 ああ……。

女 なあに？

男1 コーヒーでも入れようと思ってさ。

女 あたしやろうか？

男1 いいよ、お湯沸かすだけだから。

男4 何か面白いものないのか、この部屋には。

男2 面白いものって何だよ。

女 あたしアイスの方がいいなあ。

男4 ー例えば卒業アルバムとかさ。なあカトウ……。

男1 何？

男4 ある？

男1 氷はないよ。

女 ないの？

男1 壊れてんだよ、フリーザーが。

男4 ちがうよ、卒業アルバム。

男3 それ（ポテトチップ）食べましょうよ。

女 あ、そうか。（袋をあげようとする）

男1 あれえ……水が出ないや。

男4 何だって？

男3 （女に）ぼくがやりますよ。

男2 ホントに？

女 何？

男3 皿か何かないですか？（袋はまだあかない）

男1 やっぱり出ない。

男2 じゃあお湯が沸かせないじゃねえか。

男3 これ出せるような皿ないですか？（まだあかない）

女 水道が止まっちゃってるの？

男1 そう言えば断水予告の通知が今朝届いてたな。

男2 何てアパートだよ。

男1 アパートのせいにしたって仕方ないだろう。

男4 だからポテトチップといっしょにジュースも買ってきた方がよかつたんだよ。

女 ねえ、水が出ないの？

男2 そうだつて言ってるじゃねえか。

男3 ねえカトウさん、皿か何かないですかあ？

男1 皿がどうしたつて？

男4 （男3に）出ないんだつてさ。

男3 皿がないんですか？

男4 何？

男2 皿がどうした？

男3 いや、出ないとか何とか……。

女 出ないのは水よ。

男3 え、水が出ないんですか？

男2 そうだよ。さっきからそう言ってるじゃねえか。

男3 ……なんで？

男2 なんてって何が？

男3 なんで水が出ないんですか？

男2・男4 断水だからだよ。

男2 さっきからそう言ってるだろう。

男1 大きな声を出すなよ。

女 お皿よ。ミウラ君はお皿がないかって聞いたの。

男1 何に使う皿？

女 ポテトチップを出すお皿よ。

男1 ああ、そうか。(取りに行く)

男3 断水か……水を断つと書いて断水と読む。

男1、皿を持ってくる。

女、ポテトチップを皿にあける。

以後各自、会話のあい間にポテトチップを食べてよし。

男4 何か湿っぽいぞ。

男2 この部屋がか？

男4 この絨毯がだよ。

男2 どこが？

男4 このへん。

男1、一度座る。

男3、ジャンパーを脱ごうとする。チャックがひつかかる。

男1 あれ？

女 (男1に) どうしたの？

男1 いや……何かしようと思つてたのに忘れちゃった。

男4 何かこぼしたのか？

女 若いのに健忘症なんてカッコワルイ。

男1 何だっけな……。

男4 ここに何かこぼしたか？

男1 あ……ああ。

男4 何をこぼしたんだ？

男1 あ、そうか。冷蔵庫に何か飲みものがあるかも……。 (立ち上がる)

男4 何？

女 (男3に) 動かなくなっちゃったの？

男4 わかったのか、カトウ……。 (オレの言っていることが)

男1 わかった。冷蔵庫を調べようと思ったんだ。

男4 ちがうよ。ここに何かこぼしたかって……。

男1 ああ、そこか。こぼしたよ。

男4 何をこぼしたんだ？

男2 (男1に) あったか？

男1 やっぱりないや。

女 私に貸してごらんなさいよ。

男1 わかった。匂ってたのはそれだ。

男4 匂ってたのはこれ？

男1 汚ないものじゃないから気にするなよ。

女 こういのはね……こう……ジワジワと……チャックをだましましたましやらないと……。

男4 あ。このニオイだ。

男2 ゲロ人間。

男3 ゲロ人間だあ。

男4、男2へ手を近づける。

男2 やめろ、馬鹿！

続いて男3へ。

男3 わあああ……何んですか！

女 動いちゃダメよ！

男1 静かにしろって言ってるのがわからないのか。

女 じっとしてなさい。

男4 何なんだよ、これ。

男1 牛乳だよ。

男4 牛乳？

女 これがこっちに……こう……なれば……。

- 男1 朝こぼしたんだから今頃は発酵してヨーグルトになってるさ。喰ってみろよ。
- 男4 馬鹿言え。
- 男2 チャックがはずれないのか？
- 女 はずれそうなんだけども……。
- 男2 オレにやらせてみるよ。
- 男3 いいですよ。
- 男2 遠慮するなよ。
- 男4 ニオイが手についた。
- 女 できそうなんだから邪魔しないで。
- 男1 洗ってくればいいたろう。
- 男2 貸してみろって。
- 女 やったわ。
- 男3 ホント？
- 男2 どれ？（男2が触ると再びチャックはひっかかる）
- 男4 水が出ない！
- 男3 またひっつかかっちゃったじゃないですか、もう！

男2、大笑いしながら「ゴメンゴメン」と謝る。

男1 (強く) 静かにしろ!

他の四人 ……?

男2 何だ? どうかしたのか?

男1 いや……夜も更けたし、あんまり騒ぐと隣近所の人に迷惑じゃないかって思っ
てさ。

他の四人 ……。

男1 このアパート安普請だから隣の部屋に声が筒抜けらしいんだ。

男4 隣りの人から文句言われたことあるのか?

男1 いや、隣りに住んでる人は滅多に部屋にいないみたいだから平気だと思うけど

……この部屋の下に住んでるのが……ちょっと恐い人なんで……。

男4 恐いって?

男3 誰が住んでるんですか?

男1 うん。それがどうやら……ボクサアらしいんだ。

他の四人 ボクサア?

男1 しっ……。

問。

あとがきに代えて

劇団シヨーマもおかげさまで創立五周年を迎えます。長いような短いような五年間ではありましたが、何とかここまでやってきました。有形無形の御支援にこの場をかりて心から感謝の意を表します。

「今年も海に行けなかった……」とボヤいていた昔が懐しく、最近は「海って何？」と根本的な疑問さえ持つようになったのですから、ぼくらもいよいよホンモノです。

しかも、ぼくの戯曲集を出してくれるという心やさしい出版社があるのですから、海がいったい何だったのかわからなくなってもぼくは平気です。

「フツの生活」に背を向けたぼくらの辿る運命を、憧憬むねがれと生贄いけにえの対象として、今後も暖かくなおかつサデイスティックに見守り続けていただけのなら、こんなうれしいことはありません。

とても「ふり返る」ような立派な過去は持っていないのですが、この本を買ってくださいった方のためにサービスピス精神を発揮して、劇団シヨーマの五年間をザッとふり返ってみようと思います。

★'82・10 第一回公演 『み・ら・あ』

於／早稲田小劇場池袋アトリエ

旗挙げ公演です。

「演劇界に革命が起こった！」と言われるはずの公演でした。処女作はこの劇団でも幻の名作と相場が決まっています。

★'83・5 第二回公演 『ゴッドファーザー』

於／東長崎・素行社工房

大学（日大芸術学部）の近くの風呂屋を改造して作った五十人も入れれば満員の小さなスペースでの公演でした。

フランシス・フォード・コッポラの映画とは何の関係もありません。これは、つかこうへいの『戦争で死ねなかつたお父さんのために』に触発されて書いた作品で、トイレット・ペーパーの欠乏やチクロ（これはもう死語ですね）の恐怖を苦しい思い出として語る平和な時代の父親たちを描いた悲喜劇でした。

★83・9 第三回公演 『ある日、ぼくらは夢の中で出会う』 於／池袋シアター・グリーン

シアター・グリーンが毎年やっているフェスティバルに参加した公演です。

男優が四人しかいないというお家事情から生まれた作品ですが、これを書いてはじめてデタラメの楽しさを知った気がします。

この時から、演劇はテーマから生まれるのではなく、そこにいる役者から生まれるのだ——と思うようになりました。

★84・3 第四回公演 『ボクサア』／『The Lover』 於／池袋シアター・グリーン

「部屋をめぐっての一幕劇を連続上演」と題して二本立てで上演しました。

『The Lover』は邦題を『恋人』というハロルド・ピントーの作品で、他人の作品を演出したのは後にも先にもこれ一本です。

『ボクサア』の劇中、ポテトチップを食べるのですが、毎日同じポテトチップだと飽きるらしく、役者たちはこの公演の稽古、本番を通してありとあらゆる種類のポテトチップを食べつくしました。

★84・7 第五回公演 『パズラー』

於／池袋シアター・グリーン

銀行員たちが「強盗襲撃リハーサル」をくり返すというハナシです。この時から言葉ではなく風景が語ってこそ演劇だ——と思うようになりました。

千秋楽の公演中、支店長役の山本満太が登場してすぐにカウンターに鼻ツ柱をしこたまぶつけ、ひやひやして舞台を見守りましたが、無事幕をおろし、終演後、みんなで大笑いしました。

★84・11 第六回公演 『ある日、ぼくらは夢の中で出会う』 於／池袋シアター・グリーン

再演です。この戯曲集に載っているのは、ほぼこの時の上演台本です。

これまた『ボクサア』のポテトチップ同様、稽古、本番を通して役者たちはかなりの量のカップヌードルをこなしました。

★85・7 第七回公演 『アクアヴィットに酔いしれて…』 於／新宿タイニー・アリス

ずっと現代劇(?)を演^やつてましたから、このへんでガラリと趣向を変え時代劇をやつ

てみよう！　と思ったのが運のツキでした。

忠臣蔵のパロディをやろうとして、忠臣蔵そのものになってしまい困りました。が、この作品はいつか再生させてみせます。

アリス・フェスティバル⁸⁵参加作品。

★85・11 第八回公演 『ボクサア』

於／池袋シアター・グリーン

前回公演の不評をのりこえるべくとり組んだものの、出演中の俳優の一人が交通事故に遭い、やむなく途中で公演中止にしました。ぼくらはこの公演を「泣きつ顔（お）に蜂公演」と呼んでいます。

よっぽど倒れた俳優に代わってぼくが舞台に立とうと思いましたが、まわりのスタッフの誰一人としてそういう発想をしてくれなかったので言い出せませんでした。

★86・4 第九回公演 『WHODUNIT (フーダニット)』

於／下北沢ザ・スズナリ

はじめて下北沢のスズナリに登場です。

クリステイの『ねずみとり』やA・シエーファアの『探偵・スルース』、A・レヴィンの『死の罟』等、熱烈な推理劇ファンでしたので、はじめて推理劇にチャレンジしました。

雪に閉ざされた山荘を舞台にしたミステリーです。舞台装置はすばらしく凝ったもので、殺人が起きて何の不思議もない重量感のあるものでしたが、セットがいい分、芝居がやせてしまった公演だと思います。

★86・6 特別公演 『ボクサア』

於／大阪オレンジ・ルーム 池袋シアター・グリーン

初めて大阪で公演しました。旅公演というのがこんなに楽しいものだと知りませんでした。

この作品は、ぼくがかつて住んでいたアパートで起きた実話に基づいて書いたもので、この劇の素材を提供してくれたぼくの部屋の下に住むボクサア(?)に、一度この芝居を見てほしかった……と今でも招待券を贈らなかつたことを後悔しています。

★86・11 第十回公演 『けれどスクリーンいっぱい』

於／下北沢・駅前劇場

ここ数回、演劇性の追及の余り一幕劇に行きつかざるを得なかつた自分の作劇方法に飽きて、何か時間や空間を自由にとらせるような芝居がやりたくて作りました。

内容は、サラリーマン、アパート管理人などごくフツツの人々が、「アナザー」と名乗るもうひとりの自分との戦いを通して、ドラマチックに変身していく姿を二人一役という

趣向で演じました。

★87・3 小宮孝泰十劇団シヨーマ公演『パズラー』

於／下北沢ザ・スズナリ

コント赤信号の小宮孝泰、室井滋らとの共演でした。
打ちあげのノリのよさは、さすが芸能人とただただ感嘆しました。

★87・8 第十一回公演『ウォルター・ミティにさよなら』

於／新宿シアター・トップス

初めてTHEATER/TOPSで公演しました。勤め人、刑事、サイボーグという三人の主人公が、それぞれの物語を主張しあい主人公の座を争う——という内容で、娯楽性たっぷりの活劇でした。

★87・11 第十二回公演『アメリカの夜』

於／新宿シアター・トップス

執筆中です。『けれど…』と『ウォルター・ミティ…』とこの作品が、ぼくらの新しい代表作になるはずです。

高橋いさを（たかはし・いさを）

1961年、東京生まれ。劇作家・演出家。

日本大学芸術学部演劇学科在学中に「劇団ショーマ」を結成して活動を始める。2018年に「ISAWO BOOKSTORE」を立ち上げて活動中。著書に『バンク・バン・レッスン』『極楽トンボの終わらない明日』『八月のシャハラザード』『父との夏』『モナリザの左目』『I-note 演技と劇作の実践ノート』『映画が教えてくれた』（すべて論創社）など。

※上演に関する問い合わせ：

〈高橋いさをの徒然草〉(ameblo.jp/isawo-t1307/)に記載している委託先に連絡の上、上演許可を申請してください。

ある日、ぼくらは夢の中で出会う

1987年12月10日 初版第1刷発行

2019年12月10日 初版第5刷発行

著 者 高橋いさを

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／栗原裕孝

印刷・製本／中央精版印刷 組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1874-0 ©TAKAHASHI Isao, 2019 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。